



『リスボン航海記』について：
小説としての日記あるいは日記としての小説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009957

『リスボン航海記』について

—小説としての日記あるいは日記としての小説—

近藤直樹

I

ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) は、病氣療養のため1754年リスボンに向けて旅立った。その航海途中の7月25日とリスボン到着後の8月12日の2回、彼のほとんどすべての作品を出版したアンドルー・ミラー (Andrew Millar) に手紙を書き送っている。残念ながらこれらの2通の手紙は他のフィールディングの手紙の多くと同様に現存しないのだが、これらの手紙を読んだある人物が、その内容を次のように要約して書いている。

He [Fielding] has almost finish'd the History of his Voyage thith-
er, which he offers to Millar as the best of his performances;¹

もちろん、作者の言葉を鵜呑みにすることはできないし、フィールディングがどれほど真剣に“the best”と言っているかはわからない。そして実際、『リスボン航海記』 (*The Journal of a Voyage to Lisbon, 1755*) は恐らく彼の最高傑作ではないのだが、フィールディングが私信の中で信頼する出版者にこのように言っているという事実は注目してもよいだろう。この作品が彼の「最高の作品」ではないにしても、「最後の作品」であることをフィールディングは自覚していたのである。

I would, indeed, have this work – which, if I should live to finish

1 *The Correspondence of Henry and Sarah Fielding*, ed. Martin C. Battestin and Clive T. Probyn (Oxford: Oxford Univ. Press, 1993), p. 115, n. 6.

it, a matter of no great certainty, if indeed of any great hope to me, will be probably the last I shall ever undertake — to produce some better end than the mere diversion of the reader.²

最後となることを意識しつつ、このような自覚を持ってフィールディングは書いたわけであるから、そこに込められた作者の意気込みを過少評価してはならない。

7月28日の日記——本文には日付はなく、日曜日とだけ記されている——によれば、フィールディングが“voyage-writers”の仲間入りをしようと考えたのは、ドーバー海峡にあるダウズ停泊地にいた時であると書かれているから、7月2日ということになる。とすると、出発から到着まで日記は毎日書かれているので、7月2日以前の日記は記憶をたよりに書かれたことになる。³そして、その第一日目の日記（6月26日）に“my readers”（p. 202）という言葉が早くもあらわれている。フィールディングは最初からこの航海記を、出版するために、人に読まれるために、読者を想定して書いているのである。⁴しかも、航海記を書いて出版するには大いなる才能が要求されるということ、自ら序文で主張しているのである。

To render his relation agreeable to the man of sense, it is therefore necessary that the voyager should possess several eminent and rare talents; so rare indeed, that it is almost wonderful to see them ever united in the same person. (p. 184)

2 *The Journal of a Voyage to Lisbon*, p. 261. テキストは Everyman's Library を使用し、以下引用の頁数は括弧内に付す。なお、このテキストはいわゆる“full-length version”に依っている。

3 日記の中に、“in that time”（p. 201）とか“as I remember”（p. 215）といった過去を振り返る表現がみられることも、その事実を裏づけている。

4 この作品の刊行の意図は、異母弟のジョンへの手紙（7月12日付）にも表明されている。*The Correspondence of Henry and Sarah Fielding*, p. 105.

このように言いつつ、フィールディングは航海記を書くのである。航海記と航海記作家についてここで論じながら、彼は自らがその「稀有な才能」の持ち主であることを暗に自負していると考えられる。「耐え難い孤独を癒すこと」がこの航海日記を書き始めたそもそもの動機であるにせよ、⁵ 彼は船旅の徒然を託しながら手すさびに航海記を書いたのではない。確固とした目的意識を持ってフィールディングは航海日記を書いたのである。

その意識は序文の存在自体が物語っている。小説というジャンルの誕生期である18世紀には、序文を書いて自らの作品を弁明することが一般に行われたが、フィールディングもまた彼の実質上の最初の小説『ジョウゼフ・アンドルーズ』(*The History of Adventures of Joseph Andrews*, 1742)においてそうしている。そして彼の棹尾を飾るこの『リスボン航海記』においても、再び序文による弁明を行っている。小説に対するのと同じ態度でもって彼はこの航海記に取り組んでいるのである。死に直面しながらも、フィールディングは新しいジャンルに文字通り航ぎ出したのだ。

確かにそれは新しいジャンルなのだ。小説から航海記へという形式上の変化だけではなく、作家としての方法論上の新しさなのである。『ジョウゼフ・アンドルーズ』の序文と『リスボン航海記』の序文とを比べてみると、「おもしろくてためになる」という目的においては同じであるが、各々の作品の依拠する基盤が決定的に違う。端的に言えば、その違いは叙事詩に対する評価の相違にある。小説家としてフィールディングは、叙事詩の鼻祖たるホメーロスを称賛し、“a comic epic-poem in prose”⁶ という高らかな宣言のもとに小説を書き出した。そして次作の『トム・ジョウンズ』(*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749)において、ホメーロスを神とみるアリストテレスの叙事詩理論に則りながら、このマニフェストを完璧に作品の形で提示した。だが、最後の作品である『リスボン航海記』では、フィール

5 *Ibid.*, p. 106, n. 6.

6 *Joseph Andrews* (Penguin English Library), p. 25.

ディングはホメーロスへの全面的賛美を撤回している。

... the odyssey, the Telemachus, and all of that kind, are to the voyage-writing I here intended, what romance is to the history, the former being the confounder and corrupter of the latter. I am far from supposing that Homer, Hesiod, and the other ancient poets and mythologists, had any settled design to pervert and confuse the records of antiquity; but it is certain they have effected it; for my part I must confess I should have honoured and loved Homer more had he written a true history of his own times in humble prose, than those noble poems that have so justly collected the praise of all ages; (p. 185)

彼が試みている航海記は“true history”であり、それに対してホメーロスの『オデュッセイア』は“romance”であると言うのだ。フィールディングが“romance”という言葉に付与した否定的ニュアンスを考えると、彼は叙事詩と訣別しているかのようである。それは『トム・ジョウンズ』の精緻な構成と『リスボン航海記』の散漫な構成を比べてみてもわかる。叙事詩を規範としない点に、フィールディングの新しいジャンルへの転換がみられるのだ。

しかし、叙事詩に範をとった『ジョウゼフ・アンドルーズ』もまた“true history”⁷と呼ばれていた。これはどういうことを意味するのだろうか。二つの作品における“true history”の意味合いが異なるのか。あるいは、フィールディングは異なった方法によって“true history”を書こうとしたのか。とまれ、フィールディングの作品を理解する際には、“true history”というコンセプトは重要な鍵となる。しかも、実在した歴史上の大盗賊を主人公に

7 *Ibid.*, p. 187.

した『ジョナサン・ワイルド』(*The History of the Life of the Late Mr. Jonathan Wild the Great*, 1743)の場合には、「ジョナサン・ワイルドの描写は事実に忠実ではない」⁸と語るフィールディングであってみれば、“true history”というコンセプトの重要さはいや増すと言えよう。

II

フィールディングは序文の次に序章を書き、何故リスボンへ行くことになったのかという具体的経緯を説明している。それによると、1753年の8月にバースへ療養に行くことを勧められたにもかかわらず、ロンドンに出発していた盗賊団を潰滅させる任務を遂行したために、ますます病状が悪化し、バースでの湯治で治るような症状ではなくなった。それで、腹部から水を抜き取る治療を繰り返した後、温暖な地方への転地を考えてリスボンへ行くことに決めた、と言う。リスボンへの旅立ちは、病気という全く個人的な事情によるものであり、療養という目的のためになされたことであった。幼い3人の子供——6才の William, 4才の Sophia, 生まれたばかりの Allen——を義母に託してまで転地をはかったということは、病気を治そうという決意があったと考えてしかるべきである。フィールディングは航海記を書くために旅立ったのではないのだ。『リスボン航海記』は付随的に結果として生まれた産物なのである。いわば、それは巧まざるものであり、現実の生活の中から浮かび上がってきたものである。フィールディングの実際の生活が作品の土台なのだから、その主人公はもちろん彼自身である。彼自身が舞台の中心にいるのだ。小説の中では語り手として脇に引っ込みながらも、時おり読者の面前にしゃしゃり出てきて長広舌を揮わずにはいられなかったフィールディングが、ここでは正々堂々と正面に出てきているのである。本題とは直接関係のないリスボン行きのいきさつをわざわざ詳細に述べているのも、この

8 *Jonathan Wild* (Everyman's Library), p. xviii.

作品に臨むそうした自らの姿勢を示すという意味合いがある。そしてまた、それは長々と脱線して個人的見解を展開することを正当化するのである。

さて、自らを中心に据える語りの技法としてフィールディングが採ったのは、journal(日記)という形式である。曜日と日付——途中からは曜日のみとなる——の下にその日の出来事が記述されていくわけだが、必ずしもその日のうちに日記が書かれているわけではない。先に述べたように、7月2日以前の分は記憶をもとに後から書かれたものであるし、7月14日から21日までの日付を誤っている——以後は曜日のみとなる——のも、日記がその日に書かれたわけではないことの証左である。そして7月26日——本文では金曜日とだけ記されている——には次のような記述がある。

By the captain's advice we likewise laid in some stores of butter, which we salted and potted ourselves, for our use at Lisbon, and we had great reason afterwards to thank him for his advice.(p. 273)

この文中の“afterwards”という語が明らかにしているように、このように書けるのはのちのちの事情がわかっているからである。したがって、後日になってからこの日記は書かれたか、あるいはこの部分が書き加えられたことになる。もちろん、そうしたことは日記を書く場合には実際にあることだろうが、この文章のように未来の結果に言及するということはないのではないか。フィールディングは日記を日記そのもののために書いたのではないのだ。出版するために、人に読まれるために、書いたのである。彼のこの日記は純粋な意味での日記ではなく、日記という一つの形式・一つのジャンルを意味するものにすぎないのである。

フィールディングは日記の書き手として思いのたけを自由に語る権利を手に入れるためにこの形式を選んだのだが、あくまでそれは読者に語る日記である。読まれるための航海日記である。だから、彼は航海に関わりのない私

的なことがらは省略している。例えば、7月22日付のジョンへの手紙には、執事の Boor が不正をはたらいていないかという気がかりや、フォードフックの財政状況と小麦相場に対する心配などの細々とした私的なことがらが、小心者の手紙のように書き連ねられている。しかし、同じ日の日記には、船長が陸に上がってある紳士と食事をしたことと、夕方にスイス人の船長が訪ねてきたがすぐに帰ったことが書かれているだけである。ジョンへの私信に書かれていることの方がフィールディングには関心事であったにちがいないのだが、そのことは日記には一切記されていないし、ジョンに手紙を送ったという事実すら触れられていない。この航海日記には、航海中に書き送ったあらゆる私信について、全く言及がないのである。この点からも、フィールディングが書いているのは、通常の意味の日記とは異なることがわかる。

序文で語っているように、フィールディングは“true history”を書こうとして、それを日記の形で書いたわけであるが、事実が事実であるという理由だけで記述されるべきではないとも彼は考える。書くに値することがどこにでもごろごろと転がっているわけではないのだから、旅行記作家は書くべきことを選択しなければならない、と言う。

To make a traveller an agreeable companion to a man of sense, it is necessary, not only that he should have seen much, but that he should have overlooked much of what he has seen. Nature is not, any more than a great genius, always admirable in her productions, and therefore the traveller, who may be called her commentator, should not expect to find everywhere subjects worthy of his notice. (p. 183)

ここにもまた、かつて『ジョウゼフ・アンドルーズ』の序文で主張していたことからの逸脱がみられる。フィールディングはここでは、「人生は正確な観察者にはいたるところに滑稽なものを提供する」⁹と述べていたのだ。

彼は「正確な観察者」であり続けたが、以前よりも醒めた目で人生の出来事をながめるようになったかのようである。

しかも、事実を選ぶだけでなく、記述される事実も完全にあるがまま描かれるわけではない。いかに“true history”といえども、“some few embellishment”(p. 188)は必要である、と言うのだ。つまり、事実がそのままの形で作品として結実することはない、ということである。

事実の選択の上に脚色を加える、この一見したところ日記にふさわしくないような書き方によっても、“true history”たりうるとフィールディングは考えている。これは、サミュエル・リチャードソン(Samuel Richardson)の手法と対極にある。リチャードソンの書簡体小説が旨としているのは、「瞬間に即して書く」ということであつた。事実をあるがままに、そして何が重要な事実なのか判断する余裕のないうちに書き連ねることによって、読者をその場に立ち合わせるような臨場感を醸し出すことがリチャードソンの採った方法であつた。そして、彼もまたそうした自らの小説をロマンスではない“true history”と呼んだ。このリチャードソンの手法にフィールディングは対抗しているかのように思われる。リチャードソンの『パミラ』(*Pamela; or, Virtue Rewarded*, 1740)の道德意識がフィールディングに小説を書かせる契機となつたと言われているが、最後の作品である『リスボン航海記』においてもリチャードソンへの対抗意識は消えていない。序文の中でリチャードソンに対する直接の言及や皮肉なあてこすりが、そのことを証明している。パミラと同じ形式——『パミラ』は最初は手紙で始まるがすぐに日記になるのだから、同じと言ってもよいだろう——を用いることによって、フィールディングは彼流の“true history”を書こうとしている、のだと思う。

III

「瞬間に即して書く」のではなく、フィールディングは出来事から距離を置こうとする。出来事に積極的にコミットしようとはせず、当事者というよりも観察者＝語り手としての立場を貫いている。彼自身が問題となっている場合でさえ、そうである。身体が不自由なために歩行がままならず、乗船や下船の際に人手をわずらわさなければならない自分自身を、「死せる荷物」(pp.225, 243)と呼んでアイロニカルにながめている。また、あこぎな宿屋の女主人フランシス(Mrs. Francis)¹⁰を何度も「善良な婦人」と皮肉に形容し、彼女に対する怒りに我を忘れてしまうということはなく、フランシス夫婦の正反対の性格を長々と解説するのである。何事も解説なしにすますことは、フィールディングにはできないようなのだ。彼にとっては、出来事それ自体の描写よりも、そこから導き出される見解の開陳の方が重要なのである。そして、そこに目的があることが序文でも明言されている。

... if any merely common incident should appear in this journal, which will seldom, I will apprehend, be the case, the candid reader will easily perceive it is not introduced for its own sake, but for some observations and reflections naturally resulting from it; and which, if but little to his amusement, tend directly to the instruction of the reader or to the information of the public; (p. 188)

出来事にのめり込んでいるパミラのような語り手には、出来事から客観的な見解を導き出す余裕はない。当事者であることに精一杯で、悠長に評論家になどなってはいられない。しかしフィールディングは、出来事のスリリングな展開を犠牲にして、評論家のように語ることを選んでいる。時には、当

10 短い方の版では、Mrs. Humphrys という名前になっている。

事者ではなく語り手であるという姿勢が行きすぎて、日記を書いているのだということを忘れたかのように、船の中にいるにもかかわらず上陸した船長の行動を目の前で見ているかの如くに書いている (pp. 265-60)。このような日記からの逸脱は、日記から議論の展開への脱線と同じように、語る者としてのフィールディングの姿勢を鮮明にしている。

フィールディングが出来事から距離をとるのは、航海中に起こることが概して平凡であり、波瀾万丈の物語にはならない、ということもあるだろう。それでも、フランシス夫婦やヴィール船長¹¹の話はおもしろい物語になりうるのだが、フィールディングは彼らを彼ら自身のためだけに描かないのである。思うにまかせない航海、思うにまかせない身体的状況、こういった御し難さの中に埋もれてしまうことなく、出来事から議論を派生させるという確たる意思を彼は堅持しているのである。このフィールディングの解説する語り手としての一貫性をまず理解しておかなければならない。

そうした姿勢は、序章での個人的事情の説明と矛盾するものではない。ここでもフィールディングは、信ずるに足る論者であるための必須条件たる客観性を例証している。彼は、病気を押して公務を遂行した自らを英雄に仕立て上げることなく、公衆よりも家族の方が大切であると正直に告白しているのである。療養に出かけるのを延期して仕事に励んだ自分自身を客観的に見て、客観的に語っているのだ。

フィールディングは常に客観性——それは日記にはふさわしくないようにおもわれる——を保持することに努めている。それは、出来事と距離を保つことと表裏一体である。それによって、彼は冷静な解説する語り手となりうる。その印象的な例は、ヴィール船長の命を受けて船員のトムがビールをびんに詰めようとしたのをフィールディングが阻止したことから生じた、船長

11 フィールディングは彼が乗った船の船長の名を作品中では明らかにしていないが、ジョンへの私信の中では、リチャード・ヴィール (Richard Veal) という船長の名と、ポルトガル女王号 (the Queen of Portugal) という船の名を明記している。

とフィールディングの口論の場面の描写である。船の中での絶対的支配権を主張する船長は、“Sir you think I sold you the command of my ship for that pitiful thirty pounds? I wish I had not seen you nor your thirty pounds aboard of her.” (p. 267)と毒づく。この罵倒に対してフィールディングは強烈に反論するのだが、それはなかなか記述されない。ここでまず記述されるのは、船賃と船旅についての考察であり、続いて“pitiful”という形容に関して長々と意見が述べられる。こうして口論の場面は中断される。切迫した場面の緊迫感が意図的に削ぎ取られているのである。フィールディングの反応が宙づりにされたまま、われわれは長い脱線につき合わさなければならぬ。その後やっと、“I will make the reader amends by concisely telling him that the captain poured forth such a torrent of abuse that I very hastily and very foolishly resolved to quit the ship.” (p. 269)と語られる。これで読者の好奇心は満たされるとしても、出来事の展開はもはや劇的とはなり得ない。最後には船長が膝まづいて謝り、フィールディングが許したのであるが、ここでも船長を許した理由についての客観的分析が語られて、このエピソードが閉じられる。

Neither did the greatness of my mind dictate, nor the force of my Christianity exact, this forgiveness. To speak truth, I forgave him from a motive which would make men more forgiving if they were much wiser than they are, because it was convenient for me so to do. (p. 270)

この締めくくりが語ろうとしているのは、フィールディングの客観性であり、正直さである。自らに肩入れせずに語っているからこそ、彼の語ることが信頼するに足るものとなる。しかし、そうではあっても、この自己分析はやはり反ークライマックスである。「都合がいいのでそうした」と語る人物に、読者は感情移入することはできない。そうしないようにフィールディン

グが計算しているのだ。彼が読者の注意を向けさせようとしているのは、当事者としての行動ではなくて、観察者としての分析の方なのである。それを語るために、この最後の作品では、語り手として表舞台に出てきているのである。そこでフィールディングは演ずるのではなく語るのだ。張り出しではなく舞台に登場することによって、何度も繰り返される脱線は、単なる脱線であることをやめ、それ自体もまた本題を形成することになる。劇的であることを放棄しながら、日記にふさわしくない客観性を維持しつつ、フィールディング流の“true history”が語られる。

IV

フィールディングは自己を美化せずにさらけ出すがゆえに、他のものに対しても辛辣である資格を手に入れる。税関の役人、宿屋の女主人フランシス、ヴィール船長等フィールディングが直接不快な思いをさせられた人物に対してだけではなく、「ロンドンの魚屋はすべて即刻絞死刑に処す必要がある」(p. 264)というふうに、特定の人間に対して彼は容赦しない。そして特徴的なことに、そうした痛烈な批判は、客観的分析とともに脱線の中で裁断の如く語られるのである。フィールディングはやはり裁判官なのだ。非を非として断ずることが、この作品の目的の一つであるように思われる。ここにも、脱線が単なる余談として片づけられるべきではない理由がある。

しかし、脱線において総括のように引き出されることがらは、彼の小説の陽気さとは逆に、概して暗澹たるものである。日記が日々の出来事を描くものである以上、航海の辛苦はそこに反映せざるを得ない。その辛さに追い討ちをかけるかのように、暖かき楽園であるべき目的地のリスボンは、“the nastiest city in the world”(p. 285)であった。結果的に滞在2ヶ月で客死する場所となるリスボンへの道のりは、まさに死への旅だといえよう。陽気でありうべくもない死への航海日記を書きながら、それでもフィールディングはユーモアのセンスを忘れてしまうことはない。そこに、フィールディング

がフィールディングたるゆえんがあり、彼の語り手としての本領がある。「話し相手が常に必要であった」(p. 218) フィールディングは、「愉快的友人」として読者に語りかけようとするのである。

... all his [a traveller's] pains in collecting knowledge, all his judgment in selecting, and all his art in communicating it, will not suffice, unless he can make himself, in some degree, as agreeable as an instructive companion. (p. 185)

この原則を守ることによって、批判や見解によって物語がせき止められながらも、彼の日記は愉快的語り手によって語られた一貫した作品となっているのである。

船長の子ネコが海に落ちるといふ事件が起きた時、フィールディングはその出来事の記述を、“A most tragical incident fell out this day at sea.” (p. 224) という文で始める。彼は、子ネコがどうなったかが未知の段階においてではなく、救出された子ネコは息を吹き返したという結末を知った上でこの出来事を書いているのであり、「読者のやさしい気持ちを高揚させようとした」(p. 225) と述べていることからわかるように、“tragical” という形容は全くの誇張である。子ネコに関して「悲劇的事件」という大げさな言葉をまず導入することによって、mock-heroic 的雰囲気を作り出し、読者を自らの語りの世界へ連れていくのである。これは、出来事の全貌を掌握した上で物語を構成することによって、始めて可能となるのだ。

同じことが、フランスの宿屋で茶ばこが紛失した時の騒動にもあてはまる。子ネコに対して“tragical” という表現を使ったように、ここでは茶ばこをなくしたことが“calamity” (p. 244) だと言われる。結局は、フィールディングの妻の小間使いがホイ船の中に忘れていたことが判明するのであり、女主人フランスを疑った自分自身をも笑いの対象にしながら、この「大災難」の顛末が喜劇的に語られるのである。

また、フィールディングは出来事だけではなく、人物をもユーモラスに描写している。ヴィール船長やフランシス夫婦などの喜劇的人物はもとより、なにげない人物をも彼は喜劇的に描いている。例えば、船長との口論を引き起こすことになった船長トムについて、フィールディングは次のように紹介する。

After having, however, gloriously regaled myself with this food, I was washing it down with some good claret with my wife and her friend, in the cabin, when the captain's valet de chambre, head cook, house and ship steward, footman in livery and out on't, secretary, and foremast man, all burst into the cabin at once, being, indeed, all but one person.... (p. 265)

多数の者が侵入してきたと思いきや、実はたった一人である。これだけ多くの役割を列挙することによって、フィールディングはトムに喜劇的役割をも付与しているのである。余裕を持った態度でこのような喜劇的紹介を行うことによって、そこから生じる諍いが和解に終わることが暗示される。フィールディングは語り手として、出来事全体を掌握した上で語っているのである。そうである限り、この物語は運命の支配する悲劇となることはない。物語を支配しているのは運命ではなくフィールディングなのだ。

一行の航行を弄ぶ風でさえ、その力は圧倒的には感じられない。風の変化を読みそこない常に風に屈伏するヴィール船長を揶揄することによって、船長個人の愚かさだけが浮きたつのである。その結果、フィールディング自身は自然の気まぐれからも離れたところにいるかのように感じられる。時には激しい嵐が猛威を発揮してフィールディングを圧倒することもあるが、逆に自然はこの上もなく美しい光景を彼に与えもするのである。そして、それを彼は喜びに陶醉した口調で描く。自らの感情を伝えること、自らの主張を伝えること、この目的のためにフィールディングは出来事を掌握するのだ。

V

出来事の掌握が、その描写に脚色を与える余地を生む。その自由な領域をフィールディングは水を得た魚のように泳ぎ回るのだが、それはフィクションへ傾こうとするのではなく、事実を鮮やかに印象的に描き出すためである。そうして個別的事実は一般的真実へと近づく。それゆえに、彼の描く事実は「真実に基盤を持つ」(p. 188)、と正当に主張されうるのである。真実からの逸脱は意図されていないのであり、それはフィールディングが「真実と現実はおそらくフィクションの力を凌駕することができる」(p. 212)と信じていることに起因する。この文脈において、フィールディングが“true history”を書くことにこだわり、この作品が“true history”であることを強調する意味が理解されうる。

日記は毎日書かれることになっているが、注目に値することが毎日起こるはずはないので、“Nothing remarkable happened”といった表現がしばしば記されることになる。しかし、“remarkable”であるか否かは別として、生きている限り毎日何かは必ず起こるのだ。それが生きているということであり、日記を書く意味が生じるゆえんである。いかに些細なことであるにしても、“nothing”ということは決してない。例えば、7月12日の極めて短かい日記をみてみよう。

Friday, July 12. This day our ladies went ashore at Ryde, and drank their afternoon tea at an ale-house there with great satisfaction: here they were regaled with fresh cream, to which they had been strangers since they left the Downs. (p. 225)

序文での主張に反して、これは出来事そのものための記述であるように思われる。だからこそ、フィールディングはこの日の日記をたったこれだけで切り上げたのであろう。しかし、この短い記述から、航海の途中のある一

日の日常が明瞭に伝わってくるのも事実である。日常は概して些事から成り立っているのであり、些事にもまた“remarkable”なこととは違った趣きがあるのだ。フィールディングの主義主張にもかかわらず、何気ないことの何気ない描写は日記というジャンルにとって本質的なことであり、そこにも日記を読む大きな楽しみがあるのである。

日記を書く者の日常が、日記の第一のテーマなのである。その意味で、妻のメアリーの歯痛に関する一連の記述は、日記作家フィールディングの日常における感情を語っていて興味深い。読者に知識と意見を与えることを目的としていると公言しながら、全く個人的なこの出来事を彼は繰り返して記述し、次のようにさえる。

... the ease and lightness which I felt from my tapping, the gaiety of the morning, the pleasant sailing with wind and tide, and the many agreeable objects with which I was constantly entertained during the whole way, were all overcome by the single consideration of my wife's pain, ... (p. 213)

メアリーの歯痛はフィールディングにとっては“remarkable”なことであるかもしれないが、読者にとってはそうではないだろう。しかし、これが無意味な記述であるかという点、決してそうではない。図らずもリチャードソンの感傷的な世界に近づいているこの記述から、フィールディングという一人の個人が鮮明に浮かび上がってくるのである。語り手として舞台上立つフィールディングを、われわれはまざまざと見ることができる。それは、フィクションを凌駕する現実の力が些事にこそあるからであろう。そして、文学が力を得るのはそこからなのだ。フィールディングは意図しなかったにもかかわらず、彼の語り手としての力量がその力を引き出したのである。

確かに、「個人ではなく種族を描く」¹² ことがフィールディングの作家と

12 *Joseph Andrews*, p. 185.

してのテーマであり、『リスボン航海記』で繰り返される脱線は個別的なものから一般的なものへの敷衍という側面を持っている。しかし、それを語っているのは、フィールディングというまぎれもない個人である。出来事から引き出される見解もまた、いかに客観的であろうと試みられても、それは同時に個人的なものであることを免れ得ない。しかも、その個人が語り手として前面に出ている以上、日記というタイトルが暗示するように、この作品は個人的なものであるのだ。フィールディングはフィールディングという個人をこの作品で描いたとすることができる。彼の主張するところとは逆に、個人的であることの文学的可能性を、フィールディングはこの作品で証明しているのである。小説から日記へのジャンル上の航海は、“remarkable”なことから“nothing”への航海なのだ。そして、その航海の航路こそが“true history”なのである。“Nothing remarkable happened.”という文章ほど、日常を彷彿とさせる“true history”はない。フィールディングの歩みは、“true history”をめぐる歩みだったのだ。

『リスボン航海記』はフィールディングの上陸とともに終り、彼の著作もこの作品とともに終わるが、小説としての日記あるいは日記としての小説は、この作品とともに文学の歴史の中に確かな場所を獲得した。なぜなら、フィールディングがここで試みている出来事の掌握は、現実認識という小説の定義そのものへ至る道であり、日記として記述した彼流の“true history”は想像力という小説の根源を擁護するものであり、そこから派生する脱線は小説の自由で広大な領域を知らしめるものだからである。